
evil music

高橋 健一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

evil music

【Nコード】

N8270Q

【作者名】

高橋 健一

【あらすじ】

何も知らないうちに地獄におとされた高校生、皆守。

彼は地獄で天使と戦う1人の少女と出会う。

彼らは悪魔となり、天使を討伐しなければならぬらしいのだが・・・

果たして、何のために戦うのか。そしてなぜ地獄にいるのか。謎を抱えたまま、彼らは戦い続ける。

注※アニメ「Angel Beats!」の影響を強く受けていま

す
W

また、他のアニメや漫画などのパクリ的なネタもありますので
ご了承ください。

s t a r t (前書き)

初めまして m () m
高橋です。

「evil music」は僕の処女作であり、先日観直した「Angel Oeats!」に

多大な影響を受けております w w
ですが一応世界観などは変えてありますので、ファンフィクション
は登録しませんでした。

なので、「パクリじゃん!」など思うと思いますが、作者も重々承
知していますので、生暖かい眼差しをおねがいたします w w

s t a r t

7月28日――

俺は部活帰りだった。

いつも通り登校して、いつも通り曲を練習し、いつも通り楽器を片づけて……

それから……

それから……

俺は死んだらしい。

「はっ!？」

暗闇の中、俺は目を覚ました。

唐突な目覚めの後、目に入ってきた景色は……
空に浮かぶ島。

しかも何故か逆さまになっている。

……現状がうまく理解できない。

「ここは……日本か?……」

混乱したまま呟くと、

「違うわ」

いきなり後ろから声が聞こえた。

バツ!と振り向くと……

『フワッ……』

女……の子?……

そこには、キレイな顔立ちをした女の子が立っていた。

「あなた、名前は？」

出会って間もなくかけられた質問。

戸惑ったまま固まっていると、向こうが痺れをきらしたのか

「聞こえてるの？」と顔を近づけられた。

「あ……ああ……名前……名前……」

名前？……

俺の名前は……

何故か頭がズキンと痛んだ。

みなもり
「皆守……だ」

「皆守君ね？ 私の自己紹介は後ですから、今は私についてきて
そう言っただけの子は歩きだそうとする。

「ちよっ……ちよっと待てよ！俺はまだ何も聞かされて……」

「いいからついてきて。急がなきゃいけないの」

『ガウン！！』

銃声のような音が聞こえた。

あたりを見渡しても何もいない。

「なんて言ってる間に……もう来ちゃったみたいね」

女の子に目を向けると、彼女は空を見上げていた。

「なっ、何だよ今の音！」

俺は彼女に向かって言った。

すると彼女は答えるかわりに何かを唱えた。

「アーツ…クリスタルバレット」

そう呟くと、何も持っていなかった両手に、リボルバーを生み出した。

「皆守くん」

突然名前を呼ばれた。

「何だよ？」

「危ないから、そこでじっとしてて」

「はっ？」

それ、どういう意味だよ。

訊き返そうとした瞬間、彼女は俺の視界から消えた。

『バツ!』

何が起こっているかを考えている間に、

『ガウンガウンガウン!』

銃声が再び鳴り響いた。

そして俺の足元に影がつくられる。

俺は空を見上げた。

するとそこには・・・

「天・・・使？」

翼を広げて下降してくる天使のような生き物と女の子が戦いを繰り広げていた。

『ビシュッ!』

まるで舞うかのように、女の子は空中で戦っていた。

よく目を凝らすと、彼女の背中にも何かがあるのが見えた。

月明かりだけなので見えづらいが、翼だった気がした。

『ガウン!』

「きゃああああ!」

女の子の銃が天使の腕に命中した。

「バサッ・・・バサッ・・・」

仲間が傷つけられて怯えたのか、天使たちは撃たれた仲間の手を取り上空へと飛び去って行った。

『すたっ』

女の子が降りてきた。

身のこなしが軽く、体操選手みたいだった。

「ふう・・・」

少し息をついて、服をパンパン、とはらう。

あんなに戦ってたのに涼しげな顔をしている。

「お前・・・何者なんだ？」

「私? 私の名前は菊宮きくみや 未音みおん」

「そうじゃなくて!」

とてもじゃないが一般人には見えない。

「? . . . ああ . . . 私は」

> i 1 8 4 2 2 — 2 4 6 4 <

start (後書き)

と、いうワケで。

無事に第1話終了・・・じゃないですよ。ww
色々展開が急だし、解説なしでキャラ勝手に動くし・・・
困ったものですよ・・・

まあ、謎は後から解けますので、ご安心をw

ちなみに、自分が認知しているパクリ疑惑の元ネタは、

・Angel Oeats! 設定

・最○記 銃声

といったところでしょうか・・・

後々色々出てくるかもしれませんが、作者が認知していないけど
パクリじゃね？っていうネタがあるかもしれません。

そのときは、ぜひぜひご忠告をお願いいたしますm (_ _) m

あつ、あと、上にあるものすごく汚い絵は作者が中学生のころにペンダコつくりながら必死に描いていた絵をつかった菊宮さんの想像図ですww

もしかしたらあの頃は何かの画像を見て描いたかも・・・
何かのパクリっぽかったらご報告お待ちしております。

Mystery and travel

「私は・・・悪魔よ」

「ああ、なるほど。悪魔ね・・・って・・・悪魔!？」

「?ええ・・・」

俺の脳内はパンク寸前だった。

当然だ。

目の前にいる普通の女の子が突然「私は悪魔よ」なんて言い出した
ら、

そりゃ混乱するだろう。

「悪魔って・・・地獄にいる魔王とか閻魔とかの使いで、角生や
して尻尾があつて三本槍もって羽がはえてて人の不幸を見て笑つて
人間の生死を左右したりするあの悪魔か？」

「・・・少し違う部分もあるけど・・・その悪魔よ」

・・・ダメだ。余計に混乱してきた・・・

「ゴメン、菊宮・・・俺混乱してきた・・・」

「・・・そう。最初はそうかもしれないわね。私がわかる事なら答
えるわ。質問があれば言つて」

「あ、ありがとう・・・って言つても、質問だらけなんだけど・・・

」
そう言つて俺は苦笑をする。

今いる場所がどこかもわからない。どうしてここにいいのかも、何
が起こったのかも・・・

「じゃあ、最初の質問・・・いいか？」

「どうぞ」

「ここはどこだ? 日本・・・じゃないんだろ?」

「ええ。ここは、地獄よ。死んだ人間がくるの」

「地獄・・・ね。天国もあるのか?」

「あるわ。上に」

「ふーん……」

ん？……上？

俺の上にあるのって言えば……

「あの島のことか？」

頭上に浮く島を指差して菊宮に訊く。

「そうよ。あれが天国。地獄と向かい合わせになっているの」

「……でも天国って雲の上にあるもんじゃないのか？」

「……そうかもしれない。でも、ここはそもそも地球ではないから」

今最初に少しバカにしたような間が入ったよな……

「そうか……何で向かい合わせなんだ？」

「戦うため」

「はっ??」

戦う？何と？

「天使と悪魔は、対極に存在するの。だから、天使は悪魔を攻撃するし、悪魔も天使に攻撃したりするわ」

つまり、漫画でよくある展開になるわけだ。

「そして天使と悪魔はお互いにお互いの島まで飛んで行くの。だから向かい合わせになっているの。向こうでは重力も反対よ」

「ああ……だから逆さまってわけね」

「……意外と順応性が高いのね」

「まあ……信じるしかないからな。それに……」

「それに？」

「菊宮なら信じれる気がするから」

あれ？俺……初対面だよな。

でもなんか……コイツなら信じれる気がするし……
ほっとけない気がするんだ。

「……そう。信じてもらえてよかったわ」

そう言って彼女はほんの少しだけ微笑んだ。本当にほんの少しだけ。

「他にも質問はある？」

でも、すぐにその顔をしまった。

「そうだな・・・どうして俺たちは地獄にいるんだ？」

「それは・・・私にもよくわからないの。唯一言えるのは、私たちはすでに死んでいる事よ」

「じゃあ、もし俺たちがこの世界で死んだらどうなるんだ？」

「悪魔は地獄で死ぬことはないわ。年をとることもないの」

「じゃあ俺たちは不死身ってことなのか？」

「ええ。でも、悪魔が死ぬ方法は2つだけあるの」

「2つ？・・・どうなったら死ぬんだ？」

「1つは、天使に殺されること・・・」

「天使って・・・さっき降りてきてたやつか？」

「そう。あれが天使よ」

つまり、さっきの菊宮みたく天使を迎撃しなきゃ死ぬってことか。

「もう1つってのは？」

「もう1つは・・・私もよく知らないの」

「え？知らないのか？」

「うん」

マジかよ・・・

自信ありげに「2つある」なんて言うからてっきり知ってるもんだ
と思ったのに・・・

「？」

人の顔見て？浮かべてるぜ・・・

「まあ、いいか・・・とりあえず、どこか休める場所に行こう。

また天使に襲われちゃ敵わないからな」

「そうね」

そうして、俺の旅が始まった。

これから先、何が待っているのか全くわからないまま。

Mystery and travel (後書き)

ええー・・・と

「start」の前書きで言い訳しましたが、それに脳がついてこないと言いますか、

引き寄せられていくと言いますか・・・
いっそ潔く言います。

すみません!! m (|) m

自分が予想していたよりもパクリ濃度が高まりそうです!

と、いうわけで、例の「天使と戦うアニメ」というやつの影響が強まっています。

まあ、最終話と10話を何度も観返したからなのですが・・・
多分後々、名ゼリフとして主人公や親友の言葉が入ってきます。
しかも同じポジションが言う形で。

なので、その場合はまた後書きのほうで報告させていただきます。
とりあえず今回のパクリは・・・

・菊宮のキャラ 例のアニメの麻婆豆腐好きなヒロイン

です。

なけなしの文章力で書いていきますので、どうか応援よろしく願います。

Five people

「地獄って言っても一応日は昇るんだな」

菊宮の後ろでそう呟く。

「え？」

どうやら菊宮は聞こえなかったらしい。

まあ、仕方ないかもしれない。これだけ賑やかな場所にいれば。

俺たちはあの後、森の中で一夜を過ごし、起きてからこの街に向かってきた。

どうやら地獄は現実で言われているほど悪いところでもないのかもしれない。

「なあ、ここは何だ？」

今度は聞こえるように大きめの声で言う。

「ここは森に囲まれた街、ターキクル」

「ふーん……」

菊宮も少し大きめの声で答える。

「どこに向かってるんだ？」

「……家」

「家？ お前家なんて持ってたのか？」

「うん」

この世界で家を買うなんて……

余程長く居座っているのか？

それとも元からこの世界の住人とか……

いや、そもそもコイツは自分で「私は悪魔だ」って言ってたし、もしかしたら最初からこの世界にいるのかもしれない。

でも死に方を知らなかったな……

最初からこの世界の住人だったヤツがこの世界の仕組みを知らないなんて……

おかしくないか？

「皆守くん？」

「えっ？」

考えこんでいる内にぼーっとしていたらしい。

菊宮に顔をのぞきこまれた。

俺の肩に目線があるくらいだから、少し背伸びしている上に見上げられているが。

「あ・・・ああ、ゴメン。どうした？」

「家についたけど」

「え？・・・これ？」

そこにあったのは・・・

「何か変なところ、あった？」

「いや・・・ないけど・・・」

でっかい木だった。

いや、正確には「でっかい木とその上のログハウス」があった。

「・・・ここに住んでるわけ？」

「そうよ」

「1人で？」

「いいえ、私のほかに3人住んでいるわ」

「3人？そんなに仲間がいたのか？」

「ええ」

そうか。1人じゃなかったのか。

じゃあ家くらい買って住んでも不自然じゃないかもしれないな。

「入口はこっちよ」

そんなことを考えてる間に、菊宮は入口に向かっていった。
でっかい木についたハシゴを昇るところからだ。

『トントントン・・・』

『ガチャッ』

「あー！みーちゃん帰ってきたー！！」

ハシゴを昇っていると、上から女の子の声が聞こえた。

「千束、ただいま」

菊宮は女の子にそう返した。

「どうやらこの子がこの家に一緒にすんでいる住人らしい。」

「あれ？後ろの男の人だれ？」

俺に気付いたらしい。

誰・・・といわれても俺自身よくわからない。

だから固まっていると・・・

「何だ？未音ちゃんもとうとう男連れて朝帰りか？」

奥の方からおどけた声が出てきた。

「鴿さん、オヤジっぽーい！」

「何だと！？俺お前より年上だぞ！」

「だからオヤジっぽいんじゃないですかー？」

そんな風に女の子と男が楽しそうな会話をしている。

「この人は皆守くん。東の森の中で・・・ひろったの」

「いや、待て！俺はひろわれた覚えはないぞ？」

焦って突っ込む。いきなり子犬のような扱いをされるところだった・

・・・

「ひろったって！動物じゃないんだからよ？」

笑いながら男が菊宮に言っている。

「とりあえず、中に入らない？」

菊宮が突っ込みを無視して提案をした。

「で、結局あなたは誰なんですか？」

家に入り椅子に座って周りを見ていると女の子に話しかけられた。

「俺は・・・皆守。名前は思い出せない。歳は18歳。生きてた時の記憶は・・・音楽をやっていた事しかない・・・」

俺が答えられる情報と言え、本当にこれくらいだった。

他の記憶はほとんど言っていない程ない。

唯一これ以外である記憶は・・・死の瞬間。

死因も周りの景色も思い出せないが、死んだ感触だけは覚えている。

体のあちこちが冷たくなっていく感覚……

「まあ、そんなとこだろうな」

俺の向かいに男が座った。

「みんな覚えてるのはそれくらいさ」

「……そうなのか？てか、あんたは誰だ？」

「俺は陽哉はるや 鶴れい。お前と同じ18歳だよ。生きてた頃は薙刀やってた……はず？」

そう言って陽哉は笑顔を浮かべている。人懐こいヤツなようだ。

「いや、疑問形で言われても……」

「あたし、吉崎よしざき 千束ちさくです！歳はみーちゃんと一緒の17歳！生きてた時は陸上やってみました！」

「お……おう……そうか……」

いきなり目の前に女の子が飛び出してきて叫んだ。

「あの、あたしさっきから気になってたんですけど、みーちゃんとどう出会ったんですか？」

「はあ？……」

「あたし少女漫画とか大好きで、そういうの気になるんですよ！やっぱり運命的な出会いとかしたんですか？てかもう付き合ってます？みーちゃんは可愛いですよね！どこが可愛いってやっぱり……」

「お前は声がでけえんだよ！！」

『ゴツッ』

「きゃっ！」

鈍い音とともに千束ちゃんが倒れた。どうやら陽哉に頭を殴られたらしい。

「痛いですー……」

「俺だって耳が痛えよ！」

そんな光景が目の前で広がってる中、菊宮は……

「ズズ……美味いわ」

俺の横でのんきにお茶を飲んで和んでいた。

「あれ？　そういえば、ここに住んでいるのは菊宮を抜かして3人だ
つて……」

「ああ。ちゃんともう1人いるよ」

『ガチャっ』

「ん？　また陽哉君と千束ちゃん騒いでるの？」

タイミングよく3人目の住人が出てきた。

「折原さん！　おりはら鴿さんがイジめるー……」

「あはは！　またイジめられてるんだ？」

「……何故か陽哉が嫌そうな顔をしている。　何でだ？」

「でも確かにイジめられてる千束ちゃん、可愛いもんね……」

「そう言って折原とか言うヤツがニヤニヤしている。」

「ダメだよ？　鴿君。あんまり女の子イジめちゃ……嫌われちゃうよ？」

「うっ……」

「……なるほど。コイツ怖いな……」

「初めまして。皆守くん。さっきの自己紹介聞こえてたよ」

「あつ……初めまして」

「僕は折原 おりはら 優人 ゆうと。19歳だから1つ年上だね。生前はラジオが大好きでした。一応DJ見習いってところかな？　よろしくね」

そう言って爽やかに笑った。

「こちらこそよろしくお願いします」

こうして俺は菊宮の家に5人で暮らすこととなったのだった。

Five people (後書き)

今回のパクリ

・新登場のキャラ設定

陽哉くん 天使と戦うアニメの青い髪の子

千束ちゃん →の子の嫁

折原さん レストランでバイトするアニメのキッチン担当

って感じです……

あからさまにならないように、パクリ暴露もお茶を濁す形にしてみました。ばれますかね？ww

またのおこしをお待ちしております。

Arts

この家の住人全員とあいさつを終えた後、俺は色々な質問をしたが、地獄の本質についての質問は菊宮に訊いた時と同じ反応だった。

「俺たちもよくわかんねえんだよ」

陽哉はそう言った。

「そうか……」

結局みんな何もわからないままここで暮らしていたのか……

「まあ、いつかわかるさ。今から気負ったって仕方ねえよ。それより楽しまなきゃな？」

そう言って陽哉は歯を出して笑う。

「……そうだな」

つられて少し笑顔が出る。

陽哉とは友達になれそうだった。

「皆守さん……私さっきから思ってたんですけど……」

いきなり千束が話しかけてきた。

しかも少し暗い顔で。

「どうした？」

「何で私には何にも質問しないんですかぁー！ー！？！？」

「……は？」

千束の叫びに俺は戸惑う。

「また始まったか……」

陽哉は呆れた顔をしていた。

「だって、みーちゃんにはもう訊いたって言ってたし、鵠さんにも折原さんにも質問したのに、どうして私には何にも質問しないんですか！？」

「いや……だって……菊宮や陽哉が知らないことをお前に訊いてもわからないだろうから……」

「その判断は正しいぞ皆守。事実そいつじゃわかんねえからな」

俺の発言に陽哉が笑いながら返事をする。

「もー、鴿さんまで！！私をバカって言いたいんですか！？」

「実際そんな感じじゃねえか」

「鴿さんだって私と大して変わらないくせに！」

「んだと！お前よりはインテリ系だっつーの！」

「どうせいつも薙刀振り回してるだけで頭なんか使ってないじゃないですか！！」

「……こいつらは小学生か？」

「いやいや……楽しそうだね」

そして折原さんが微笑ましそうにそれを見つめている。

菊宮は……

「ズズ……やっぱり美味いわ」

1人でお茶飲んで和んでいやがる……

「ハァー……ハァ……」

どうやら2人とも疲れて口げんかが終わったようだ。

「ふう……で、何の話だったっけ？」

陽哉が息を整えながら訊いてきた。

「そういえば、みんなも自分たちの名前や年齢と、そのほかの1つだけ記憶が残ってるんだよね？」

「そうだよ？」

折原さんが答えた。

「何でその1つだけが記憶に残されているんだ？」

「あれ？未音ちゃん教えてなかったの？」

折原さんが菊宮の顔を軽く覗きこむ。

「ああ……忘れてたわ」

「そっか……」

みんなで軽く苦笑いをする。

「？」

本人は不思議そうに俺たちを見つめている。

「皆守くん、僕たちが持っている唯一の記憶は、一番心の奥に刻ま

れている記憶なんだ。つまり、それだけ強い記憶だから、地獄まで持ってこれたっていうわけ」

折原さんが説明してくれた。

「じゃあ、俺にとっては音楽をやっていたことがその記憶だってことか・・・」

「そして、その記憶から僕たちは『アーツ』と呼ばれるものを作り出せる」

「アーツ？」

「そうだな・・・陽哉くん！ちよつとアーツ出してみて」

「はいよ」

陽哉は椅子から立ち上がり、両手を見つめる。

「アーツ・・バーサーク ブレード」

そう呟くと、陽哉の手の中に赤い薙刀が現れた。

「こんな風に、自分が持ってきた記憶から武器をつくりだす事ができるんだ。僕の場合はラジオを出せるよ」

「・・・アーツ・・・か・・・」

「まあ、これは経験で覚えていけばいいから、焦らなくていいからね」

「じゃあ、俺は音楽に関わるもの・・・ 楽器でも出せるのだろうか。」

菊宮は昨日、両手にリボルバーを生み出していた。

それは、銃が記憶に残っているということなのか？・・・

「なあ、菊宮の記憶は何なんだ？」

銃が出せるような記憶なんて・・・西部劇でも好きだったのだろうか。

「私は・・・ずっと本を読んでいたこと」

「本？小説とかか？」

「ええ。だから、この世界で本を読むと、その本の主人公が持っている能力を使う事が出来るの」

「そうなのか・・・じゃあ、昨日の銃は？」

「あれは、この世界に来てから唯一読めた本の主人公が使っていた能力を使ったのよ」

「他には何か出せないのか？」

「余程記憶に残っていたり新しい記憶だったら本を見なくても出せるけど、古い記憶とかになると、一度別のアーツを出さなきゃいけなくなるわ」

「別なアーツって？」

「アーツ…メモリーズ ブック」

「これよ」

菊宮の手には、厚めの辞典みたいな本が現れていた。

「この本に記憶を残していくの」

「つまり、資料集みたいなもんか・・・」

「・・・少し違う気もするけど、そんな感じよ」

「ふーん・・・」

と、ここで納得してしまいそうになったが、大事なことに気が付いた。

今度こそ千束にもキチンと訊かなきゃまた叫び始める。

「ち・・・千束は・・・何の能力なんだ？」

「私は靴が出せます！！陸上部だったので！！」

目の前で再び叫ばれる。

「お前・・・どっちにしても叫ぶんだなあ・・・」

自然にため息が漏れた。

「さて・・・じゃあ皆守の部屋案内でもしますか」

陽哉がそう言って立ち上がる。

「ああ、サンキュ」

「ここが俺の部屋。んで、ちいの部屋、未音ちゃんの部屋って続く・・・場所わかったからって夜這いとかすんなよ」
そう言って陽哉が笑う。

「しねえよ！てかお前・・・ホントに親父くさいな。年齢誤魔化し

てねえか？」

笑いながら反撃してやる。

「なっ、お前まで！俺そんなふけてる………？」
肩を落として落ち込む。

「冗談だよ、冗談」

「……けっ！ここがお前の部屋だよ」

「ふーん……意外と広いな」

「家具とかは金がありゃ買ってきてもいいし、その辺にある木使っ
てつくっても良いぜ」

「そっか……所持金ねえもんな」

「そういうこと。じゃ、俺も部屋戻るから夕飯まで好きにしろよ」

「ああ、ありがとな」

「おう」

ドアが閉められる。

「何か展開が急すぎるよなあ……」

それでも俺は、この場所で生きていくんだ。

俺自身の記憶を取り戻して、なぜ地獄に來させられたのかを知るた
めに。

Arts (後書き)

・・・見ないでえ!!

はい、お約束の言い訳です。

まあ、今回は自分でもパクリ濃度は薄いんじゃないかなー、なんて思ったりしましたが・・・

それより何より展開が急すぎる!

皆守くんごもつとものです!!

読んでくださっている皆様も、さぞかし読みにくいと思われるでしょう。

申し訳ございません!!

出来るだけ読みやすく楽しい文章になるよう尽力いたします。

今回のパクリは

- ・途中入った口げんか 例のアニメの青髪とその嫁のけんか
- ・主人公の友達のおっさん疑惑 同じアニメの「これなのか？」

わかりづらいですかね?

もしかしたら皆さんが気付かない程度のパクリだったかもしれませんが一応言っておきます。

またのおこしをお待ちしております。

P o w e r f a i l u r e (前書き)

えーと・・・

後書きでも色々言い訳はしますが・・・

遅くなってすみませんでした!!

(本当にもしかしたらですが) 更新を待ってくださっていた方々。
いらっしゃるかもしれません。

これからはきちんと時間を見つけて更新したいと思いますので、
また目を通していただけると幸いです。

Power failure

その日の夜、みんなで晩御飯を食べて、各自部屋に戻った。
どうやら風呂は女子が優先なようで、俺は新入りなので最後にまわった。

陽哉が入っている間、暇だったので何か思い出せないかとベッドの上で考えていたら、
眠気が襲ってきた。

昨日から色々あったからな……………

「風邪ひくわよ？」

そのまま軽く眠りに落ちかけた時、また最初の時と同じ声が聞こえた。

「ああ…………サンキュ」

気が付くと菊宮は、俺の枕の横側に立って俺を見降ろしていた。

「陽哉のやつ、まだ風呂入ってんのか？」

「あの人は、いつも長いの。だから私たちは先に入っているのよ」

「ふーん……………」

キレイ好きなのか？アイツ。

「そーいや、どうした？」

「？ 何が？」

「いや、部屋に入ってきてるから、何かあったのかと……………」

「ああ…………何だったかしら……………」

「覚えてねえのかよ！」

ホントに天然だな、こいつ。

「フツ……………」

「何だ!？」

いきなり電気が消えた。

まさか、漫画とかでお決まりの敵襲の時には停電になりますってやつか!？」

「おい菊宮!」

「何?」

「何じゃねえだろ!何でそんなに落ち着いてんだよ!」

「何でと言われても・・・逆にどうしてあなたはそんなに焦っているの?」

「どうしてって・・・敵襲じゃねえのか?」

「敵襲?何の事?」

おかしい・・・

何故か話が噛み合わない。

「な・・・なあ、菊宮。この停電って・・・」

「? この世界では夜は電気が止まるの。エネルギーもそんなに豊富じゃないから。」

言ってなかったかしら?」

「・・・言ってねえし聞いてねえけど?」

「そういえば・・・この事を伝えるためにこの部屋に来たのよ。」

「もう少しで停電になるから」って」

「なんでそんな大事なこと言い忘れるんだよ!マジでビビったじゃねえか!」

「・・・どうしてそんなに怒ってるの?」

「どうしてって・・・普通に考えていきなり停電になったらビビるだろうが!」

「そんなに大事なことだとは思わなかったの・・・ごめんなさい」

暗闇の中だから見えないが、菊宮がシュンといった雰囲気と言った。

「いや・・・いいけど」

まあ、悪気があったわけではないらしいな。

「みーちゃんーん!!」

『ボタンッ!!』

「な、なんだ?」

「みーちゃん大丈夫!? 変態でケダモノな皆守さんに襲われたりしてない!」

「・・・千束。大丈夫よ」

「ちょっと待て! その「変態でケダモノ」っておかしくないか!」

「皆守さん!! みーちゃんに手出したら承知しませんからね」

「・・・いや、出さねーよ。つか出せねーよ」

俺がこのトボけた女に手を出すだど・・・?

・・・全くとっていい程想像できねえ。

「千束。大丈夫だから。皆守くんは信用できるわ」

「「えっ?」」

「・・・なんで皆守さんまでびっくりしてるんですか?」

「いや・・・だって・・・」

そんな簡単に信用してもらえとは思ってなかったから。

「なんとなくだけど・・・わかるの。第六感で」

「第六感は違うだろ!!」

やっぱりコイツらはよくわからない。

馴染むにはまだまだ時間がかかりそうだった。

Power failure (後書き)

今回の更新が遅くなったのには色々ワケがございまして……自分、今年度になってから初めての引越しを体験しました。

その結果、新しくネットをつなごうにも素人には何が何だか全く分からず……

さらにどれだけやっても納得がいく形にならないというトラブルもあり、

今回のような事態に陥りました。

待っていてくださった方、本当にありがとうございました。

今回の話は多分今までで一番出来が悪い話だと自負しております……

ご了承くださいm(_____)m

今回のパクリ疑惑←

「第六感で」 SSとツンシュンなヒロインのラブコメな漫画のドクロツ子

多分わかる方はあまりいらっしやらないと思いますが、一応書いておきます。

尚、そろそろ戦闘シーンに入りたいと思っています。

次回こそは……!!

では、次回もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8270q/>

evil music

2011年10月6日00時53分発行